

2023年(令和5年)

2月15日

水曜日

夕刊

神戸新聞

阪神・淡路大震災のあと仮設住宅が建ち始めた1995年6月、僕は開業した。病院を飛び出し町医者になったのだ。人生初の往診は仮設住宅に入ったばかりの高齢の男性だった。震災を契機に急速に弱ったという。しかし病院の外来で見ていたお顔と、家で見た表情は全く違っていた。衰弱しているも病院の外来と違ってリラックスした自然な笑顔だった。開業当初、外来患者は1日数人程度だった。往診の依頼が舞い込むとすぐに駆け付けていた。

家に行くとその人の生活がまる見えだ。その人がどんな人なのか、そして家族関係までが一目瞭然で分かる。いつもしっかりお洒落して来られる人の家がゴミ屋敷で踏み入れることができなかつたり、ヨレヨレの服で来る人が綺麗な大邸宅に住んでいたりで予想を裏切られることが続いた。家での生活ぶりを見るのと見ないのでは病気の理解度が全く違つことに気が付いた。医師になって12年目だっ

在宅医療と匂い

随想

長尾 和宏



た。当時は、まだ在宅医療という言葉も、介護保険もなく、家族介護だけの実にのどかな時代だった。もともと生活も見られる医者になりたかった。往診依頼は、町医者になった自分へのご褒美のように感じた。

長く在宅医療に従事していると家によって漂っている匂いが違うことに気が付いた。それは台所や料理の匂いだけではない。布団や家具や壁などを合わせた総合的な匂いが家々によってまったく違うのだ。生活臭というのだろうか。犬や猫などの動物を飼っている家でも匂い方で全く匂いが違ってくる。そして患者さん自身が発している匂いもよく観察するようになってきた。老衰や末期がんの患者さんの余命まで匂いで推定する癖がついた。病院とはまったく異なる世界だ。最近、認知症は嗅覚異常から始まることが分かってきた。ますます、犬のように匂いに敏感な町医者になりたいと思う。

(長尾クリニック名誉院長)